

想　い　出

—あるかわいい外国のお客さま—

関　治　子

プロフィール

茶褐色に近い金髪のおかっぱさん。そしてやや青味勝ちのぱっちりとした眼。細長い身体を包んだズボン姿。長面の顔に、にっこり微笑むとかわいいう前歯がのぞく。

「ドミニック」ちゃんは、お父様がイギリスのかたで、大学の英文学の先生。お母様はフランスのかたで、大使館の仕事やフランス語の講師をされている。家庭には、メイドさんが二人いて、一人はドミちゃん専属である。

日本語を何も知らないお客さま

ドミちゃんが、御両親の懇願により、お客さまとして幼稚園に

来られたのは、二才八か月頃だった。背が高いので三才児の組に入っても、身体の点では難点もなかったが、まだ、お手洗いに一人で行けず、メイドさんから「ピービは？」と時々促してやって下さいと云われた。付添を離れて、幼稚園にいる間は先生の後ばかり追っていた。「ピービは？」首を横にふる。あるいはうなずく。というわけで、このことばだけが、先生とドミちゃんをつなぐ太いきずなであったのだ。

はじめて話せた日本語

「センセイ」幼稚園に来はじめて数日たってからのことだった。周囲の友だちの最も頻繁に使うことば、それは「センセイ」ということだったのだ。

友だちとはまだまだ遊べない。もちろん、皆といっしょに話を聞いたり、ゆうぎなども出来ない。しかし、ちっとも家に帰りたいくて泣くようなことはなく、先生の後をついて歩いては、新しい生活をじゅうぶんに身辺に感じていたに違いない。「おべんとう」「おくつ」「さよなら」「おはようございます」毎日毎日くり返されるこれらのことばがわかり、少しずつ云えるようになってきた。

大きなビクニックにでも行きそうなバスケット、中には、小さなサンドウィッチとミルクが入っていて、これは上手に頂けた。

やっと一人前

桜の花が咲きそろい、幼稚園でも新入のかたを迎える四月になって、新入の三才児の組に、お客さまではあるが、ドミちゃんも一人前に入るようになった。

引出しにも、帽子かけにも、クレオンにも、みんな名前がついている。ドミちゃんも、お家から上ばき、庭ばきの靴を持ってきた。こうして、他の幼児と変らない生活がはじまった。

しかし、この組に入っても、実はまだ年令が一つ下だった。このことは絵に最もよく現われて、皆がだんだんにさく画から抜け出していっても、翌年の半ばすぎても、まださく画がつづいていった。

ことばの方は、友だちや先生に何か誘われると、「いや」「だめ」という、自己の意志表示と、否定とを覚えていった。また「セキセンセイ」ということを覚えた。そのうちに「わたし大好き」とか、友だちの名前、遊具の名前など名詞をどんどんと吸収していった。御両親も、日本の子どもの中で遊ばせたいという御意向のように伺ったので、先生も無理して英語を使うようなことはなく、かえって意識して正しい日本語で話しかけるようにした。それに、メイドさんもドミちゃんに対しては日本語で話していた。

三才頃に、こうして日中の大部分を、日本語の中で生活した幼児は、極めて自然に日本語を身につけていった。たまには、おかしな日本語で、内心笑い出したくなるようなこともあったが、この半年の間のことばの進歩はめざましかった。一年近くたつ頃はほとんど完全といってよいくらいに話せるようになった。

だんだんなれてくると、時には困らせられることが出来てきた。それは、お話、紙芝居の時にになると、やはり理解が困難で興味度が他の幼児と違うらしく、部屋を歩き廻ったり、大声をあげたり、勝手に先生に話しかけたり、こういう時には集団行動がとれなかった。

朝も、早く来るようになると、一人でさっさと「ごき」を「タタミ」といいながら敷き出してままとをはじめる。友だちがくると「〇ちゃんいれてあげる」と声をかけ、この辺では他の幼児と何ら変るところもなくなった。しかし、自我がはっきりしてくると、主張もし、命令もするので、それがいつも通るとは限らず、時々、部屋の片隅に行つて泣いてしまうことも出来てきた。

歌も、はじめは口を開いていなかったが一年近くたった頃から、二小節ぐらいずつ遅れて、ずれて歌うようになった。人のを聞いてからまねて歌うので、これにはおかしかった。

幼児がよく節をつけて「イヤータナ、イヤータナ、ダレカサンはイヤータナ」ということがあるが、これを「イヤータナイヤータナ、ダレカサンはイヤータナイヤータナ」と、皆よりもよけいなものがついていたり、「こういちちゃん」を「ボーイチチャン」など、面白いこともあった。

家庭のしつけ

直接、御両親がドミちゃんをどのようにしつけていられるか知る由もなかったが、メイドさんから聞いたところと、お迎えにい

らした時をみて、大体の想像はついた。お父様は親日家で、外部では険のない、とてもいい方である。家庭では、ドミちゃんに対しては全部英語で対していられた。もちろんこのお父様は日本語が上手なのだが、ある時、ドミニクの英語が悪い英語で困りますと笑っていられた。食事の時はとくに、行儀作法にきびしいよう、食事中にお行儀が悪いとしかって別の所に連れて行かれることもあるとのことだった。

お母様は、たまにお迎えにこられると、フランス語でとてもやさしくドミちゃんに話しかけ、抱き上げる。ずいぶんかわいがっていられると痛感したものだだった。

メイドさんは「云うこと聞かなかつたらきびしくかけて下さい。この頃、云うことを聞かないのですよ。」と云っていられたから、比較的きびしい面が家庭内にあったのであろう。しかし、これらは行儀作法に多いらしく、その他は愛情に満ちた家庭と思われ、その点、ドミちゃんは幸せに違いない。

お別れ

同じ組の友だちといっしょに、一つ大きい組に行ったドミちゃんは、何もかも皆といっしょの生活をした。ことばは抑揚、アクセントなどまで、何ら変なところもなくなり、他の組の先生にも進んで話しかけたり、気のせいか服装や髪の色まで、変りないような気がしてきた。皆と同じ運動靴をはいた時は、わたしのこのくつあたらしいのよ、と見せて歩いたし、千本ひだのつりスカ―

トがうれしく、わたしもスカート」とくり返していた。やはり、幼児は、他の幼児と同じものを身につけ、同じものを持ちたかったのであろう。お辨当はいつもサンドウィッチとミルクだったが、これにゆで卵や果物が時々登場した。「わたしお弁当箱買ってもらおうのよ」「お家におはしあるもの」などお辨当に対する羨望とも受けとれるようなことを云っていたが、ごほんのお辨当は遂に一回もなかった。

こうして、手もかからず、むしろ、わがもの顔に「おはようございます」と入ってくるようになったドミちゃんだったが、この年が半ばすぎると、お父様の御転勤のことを耳にした。今度はベルシャに行かれるという。約二年の間にこんなにも日本人の生活の中に溶けこんだドミちゃんも、今度はベルシャでどんな成長をするであろう。この調子ならまた新しい土地の生活をマスターしてしまうに違いない。数年後にはまた日本に來たいとお父様がいられたが、その頃、日本語はもちろんのこと、幼稚園のことを覚えていであろうか。そう思うとさびしくなるが、ある時期を日本の子どもたちの中で楽しく過ごせたことは、彼女の社会性を培うのにもきつとプラスになったに違いない。安定して遊べたということだけでもじゅうぶんであろう。ドミちゃんがいなくなつてからは、ふと、物足りない気持ちに襲われたが、国際人としての彼女のすばらしい前途を期待するとともに、よき成長を遂げて、幸福に過してほしいものと念願している。